

P-7-25

看護師の働き方改革～看護記録時間短縮に向けた看護記録委員会の取り組み～

富山赤十字病院 看護部

○若林真由子、大井真由美、石田 美幸、白井志津世

【はじめに】診療記録の一つである看護記録は、看護実践の一連の過程を示すものであり、正確性、一貫性が求められる。日本看護連盟の看護業務量調査結果では、看護実践記録は約20%を占めている。しかし、診療報酬に関する書類作成を加えると、看護業務における記録時間は大きく増加している。自施設でも看護記録が時間外となっており、看護記録の時間短縮や効率化は看護師の労務管理において重要な課題となっており、看護記録委員会では、看護師の働き方改革の一環として看護記録業務量調査を行い、現状の評価と今後の課題を検討した。【結果・考察】令和元年に実施した看護記録業務量調査をもとに、記録内容を見直し、必要項目を集約・簡素化するためのテンプレートやセット展開の作成、看護サマリーの見直し等に取り組んだ。しかし、令和3年度の調査結果では、看護記録の業務時間量に大きな変化はなかった。要因として、診療報酬に関する書類作成における時間の増加、多職種によるチーム活動のカンファレンス記録が十分に活用されていないことやクリニカルパス適応患者の記録の重複がみられた。また、効率化のために作成したテンプレートやセット展開が適切に使用されていない現状がある。看護記録の時間短縮や効率化は、直接的な患者へのケア時間の確保や時間外業務の削減に繋がる。今後も看護記録業務量調査の結果から効率化できる記録業務を検討し、改善結果を共有・実践することが必要である。【おわりに】看護記録委員会では、次年度以降の電子カルテシステム更新に向け、活用しやすい記録形式の整備と看護記録の質を担保した記録時間の短縮や効率化に取り組み、看護師の働き方改革に繋げたい。

P-7-27

カンファレンスの活用による看護記録の質の改善への取り組み

旭川赤十字病院 看護部 5階みなみ病棟

○濱崎 真衣、及川和歌子、高橋久美子

【目的】看護記録は「あらゆる場面で看護実践を行う全ての看護職の看護実践の一連の過程を記録したものである」¹⁾と定義されている。そこで看護記録の質向上を目指し、患者情報を共有が出来るような看護カンファレンスを取り組み、看護記録の質向上に繋がった結果を報告する。【倫理的配慮】本研究は旭川赤十字病院倫理審査委員会の承認を得て実施した。【方法】研究期間：令和2年9月～10月、研究対象：師長を除いたスタッフ35名。研究方法：チームミーティングを活用し患者の問題や思いに焦点を当てた患者情報共有カンファレンス（以下、カンファレンスとする）を展開した。評価方法：自施設看護部記録委員会で使用している看護記録形式監査をもとに評価項目を独自に作成した。評価項目1.患者の希望の記載、評価項目2.患者の状態の記載、評価項目3.検討した患者目標・プラン内容の記載、評価項目4.患者と共有した目標に対する反応の記載と、カンファレンス前後で記録内容についてFisher直接確率法を用いて検定を行い $p<0.05$ をもって有意差ありとした。【結果】研究期間内でカンファレンスは23例実施した。評価項目1 $p<0.09$ 、評価項目2 $p<0.34$ 、評価項目3 $p<0.00$ 、評価項目4 $p<0.01$ であった。評価項目3.4には有意差があり、取り組み後のほうが、患者と目標などを共有する記録が記載されていた。【考察】個人だけでは明確にできなかった問題点やケア方法がカンファレンス実施により、チームで具体策を導き出す事に繋がり、記載しやすくなったと考える。またカンファレンスによりチーム内で目標やケア方法を統一化できたことで具体的な対応を記録に残すことが出来たのではないかと考える。【結論】カンファレンスを活用したことで看護記録の質の改善につながった。【参考文献】1) 日本看護協会:看護記録に関する指針(2018)

P-7-29

患者参画型看護を用いた術前訪問による信頼関係構築の過程について

伊達赤十字病院 看護部

○神谷 志穂、玉川 宏美、和泉 佳奈、碁石 久、木村明日香

【はじめに】手術を受ける患者は誰もが不安や恐怖を抱えており、手術を受ける選択が正しいかどうか、手術直前まで気持ち揺れ動くこともある。そのため、手術看護師は術前訪問にて専門知識を提供し、患者の心理状態や訴えに耳を傾け、不安の軽減に努めている。A病院手術室でも術前訪問を実施しているが、手術当日不安な表情のまま入室を迎える患者は少なからずおり、困難感を抱いていた。そこで、不安を軽減できていない要因の一つに信頼関係が築けていない可能性があると考え、患者の権利の擁護や信頼関係構築に有用である患者参画型術前訪問に着目した。【研究目的】患者参画型術前訪問において、患者と看護師の信頼関係構築に至る過程を明らかにする。【研究方法】医学中央雑誌Web版を用いて日本語の論文に限定し、シソーラス検索を実施した。「患者の医療活動参加」「患者参画型」「手術室看護」「手術前看護」「術前管理」をキーワードとし、検索範囲は原著論文とした。文献タイトル、抄録より信頼関係に関連していない文献、患者参画型術前訪問を実施していない文献は除外した。適格条件として、手術室に限らず患者参画型術前訪問を検査、手術の前日に同条件で実施している文献を用いることとし、抽出文献の信頼性について日本看護協会より出版されているクリティークチェックシートを用いて査読した。対象文献をKJ法に基づき看護師の思いや患者の言葉など信頼関係構築に影響すると思われるデータを抽出し、テーマに沿って要約した。要約したラベルを分類し、島と島の関係性を概念図に示した。真実性の確保として、スーパーバイザーよりスーパービジョンを繰り返し受け、分析した。

P-7-26

造血細胞移植合併症予防に向けた観察の標準化～テンプレートの有用性～

広島赤十字・原爆病院 看護部

○平野 聖子、豊田 和子、遠堂 春奈、吉野 有紀

【目的】造血細胞移植（以下移植）において、移植片対宿主病（以下GVHD）は、症状を早期に発見し、適切な時期に治療が受けられるよう重篤化を防ぐことが重要である。そこで、観察の標準化を目的として、テンプレートを日本造血細胞移植学会（以下学会）のガイドラインをもとに作成した。その有用性と今後の課題を明らかにする。【方法】対象はA病院移植に携わる看護師33名。方法は、1.学会が明示している実践者ラダーを参考にAグループ：看護師経験・移植経験とも5年未満、Bグループ：看護師経験5年以上・移植経験3年未満、Cグループ：看護師経験5年以上・移植経験3年以上の3つに分類し、テンプレートの使用状況についてカルテより後方的調査。2.テンプレートの使用の評価について導入後6ヶ月と1年に自記式質問紙を用いて調査した。分析方法は単純集計とし、自由記載の内容は内容の類似なものを抽出し集計した。倫理委員会の承認を得た。【結果】テンプレートの使用状況はAグループ85.3%、Bグループ87.1%、Cグループ91.9%。自記式質問紙の回収率は6ヶ月後84.8%、1年後80.0%。「早期発見につながった」と回答した者は6ヶ月後76%、1年後100%。「経過を追って観察できる」は6ヶ月後89%、1年後93%。「看護問題の評価につなげることができた」は6ヶ月後75%、1年後79%。【考察】看護師経験や移植経験年数に関わらず、テンプレートの使用はできていた。また、6ヶ月後、1年後と高い推移でテンプレートの使用が継続できていた。これらより、テンプレートを用いて統一した視点で観察ができており、テンプレートの活用は有用であると言える。一方で、観察項目から看護援助に導けていけるようアセスメント能力の向上に取り組んでいくことが課題である。

P-7-28

HCUにおけるOHAT-Jを活用した口腔ケアの取り組み

大森赤十字病院 看護部 HCU 病棟

○橋爪ゆり恵、加藤 梢、竹内 真緒、新井由利菜、鈴木 佑輔、境 美幸

【目的】当院のHCUは、脳卒中や心不全患者が多く、肺炎などの合併症を予防するうえで口腔ケアが重要な看護ケアの一つである。一方で看護師の口腔ケアの方法には個人差があり、他の検査・処置よりも優先順位が低いと捉えている現状があった。そこで、Oral Health Assessment Tool（以下OHAT-J）を用いて、統一した口腔ケアに向けた取り組みを実施したので報告する。【方法】実施期間は1か月間と設け、入室～退室までの間で実施した。対象は、JCS2～3相、口腔ケアに介助が必要な患者を選定した。導入にあたって、全ての看護師にOHAT-JのDVD教材で学習してもらった。対象患者の口腔ケアは、日々の受け持ち看護師が実施し、結果を看護記録に記載した。口腔ケア時に活用できるようにOHAT-Jの資料をベッドサイドに配置した。観察結果と実施内容は、経過を共有できるように統一したテンプレート作成し、看護記録に記載した。看護師の意識の変化は、取り組みの前後でアンケートを実施した。【結果】対象患者9名に実施した。OHAT-J点数は、全ての対象患者で口腔内環境の改善がみられ、うち最も減少したのは2名でそれぞれ4点減少した。意識調査では、口腔内評価に個人差があると感じる割合が87%→67%と改善し、OHAT-Jの継続については83%のスタッフが継続できると回答していた。【考察】口腔ケアのポイントは、実施者による差をなくし標準的なケアの継続である。OHAT-Jを導入し、観察の視点を一掃することで口腔ケア方法の差を埋めるとともに継続的なケア提供に繋がったと考える。さらに、口腔内の状態を客観的に評価し継続的に変化を追うことで、実施したケアの評価が明確となり、看護師の口腔ケアへ意識の向上に繋がったと考える。

P-7-30

集中治療室における火災対策・訓練に関する文献検討

さいたま赤十字病院 HCU 病棟

○栃木 綾乃、細井 明穂

1.はじめに 私たちはHCUに所属し日々重症患者のケアを行っているが、実際に集中治療室で火災が発生した際、院内防火マニュアルの確認のみで迅速・適切に対応できるのか疑問に思った。そこで先行研究を参考にすることで、火災対策について検討し実践的な訓練を計画する上で活かせるかと考えた。2.目的 集中治療室の火災に対する対策・訓練の内容について明らかにする。3.方法 研究デザインは文献検討とし、研究対象は会議録を除いた原著論文、報告とした。医学中央雑誌Web版(Ver. 5)を使用し、「集中治療室(ICUを含む)」「災害対策」「災害訓練」「火災」のキーワードを掛け合わせて検索を行い、本研究に相当する内容で集中治療室について言及された文献16件を抜粋した。4.結果 全16件のうち解説/特集が11件、原著論文は5件であった。集中治療室における火災の対応・対策について限局して述べた文献はなかった。文献にて述べられていた内容は「災害時の集中治療室の状況と特徴」「対策・訓練」「初動対応とアクションカード」「避難」の4つのカテゴリに分類された。5.考察 集中治療室では火災発生の可能性が低く、発生した場合も初期対応可能な環境であるため、火災に限局した文献がなかったと考える。具体的な想定をもとにしたマニュアル策定や訓練の実施が重要であり、集中治療室においては生命維持装置の継続を重要視して具体的な手順を確認することで、災害対応力の向上に寄与すると考える。6.結論 (1) 集中治療室で火災が発生した際の対応・対策について限局して述べた文献はない。(2) 集中治療室患者の搬送は危険を伴うため、トリアージや事前の準備・対策が必要である。(3) 集中治療室の特徴を踏まえてマニュアルを作成し、アクションカードを活用しながら他職種と連携し訓練を実施知る必要がある。